

初等社会科における「深い学び」の評価に関する研究

—作文を見取るルーブリック評価の検証—

Study on evaluation of "deep learning" in elementary social studies

—Verification of rubric evaluation for watching composition—

安八町立名森小学校 松名 美咲 (Misaki Matsuna)

岐阜大学 須本 良夫 (Yoshio Sumoto)

1. はじめに

これまで社会科という教科が、公民的資質の育成を育もうとしてきたことは間違いない。学習指導要領が改定されてもその方向は変わることはない。ただ、今回の改定では、その資質を育てるために、社会科の見方・考え方を働かせることが求められた。見方・考え方は、「思考力・判断力・表現力」の育成や、生きて働く「知識」の習得に不可欠であり、資質・能力全体に関わるものである。学習指導要領における「社会的な見方・考え方」の解説は以下の通りである。

「社会的な見方・考え方」は、小学校社会科、中学校社会科において、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会にみられる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」であると考えられる。
(①p.18)

社会的な見方・考え方を得ることとは、すなわち、社会的事象への認識を得るために、それについて考える視点や方法を得るということである。しかし、学習者がその見方や考え方を本当に習得し活用できているかは、丁寧な見取りや評価をしていかねばならない。では、そうした理想的な評価がすでに行われているかという、現時点での評価は、業者のテストによって測定されている思考・判断・表現など、知識と混同されて取り扱われているのが現状も見受けられる。本稿では、そうした初等社会科の現状に対して、実際に思考・判断の評価問題を作成し、子どもたちが取り組んだ結果から思考の評価の在り方について考察をしていきたい。

2. 社会科の知識と思考・判断の関係性

①社会科の知識と思考・判断・表現力

これまでの社会科教育において、社会的事象から、学ばせたい上位の知識の習得を目指す社会認識体制については、森分孝治氏の社会認識体制の考え方をうけて語られることが多かった。この考えの詳細は避けるが、社会認識を得る過程では、知識を理解したりそれを結びつけて考えたりする過程が存在する。その過程を学校現場の活動に当てはめると、1回の授業の中で子どもたちが事実や知識を理解したり、単元の授業を重ねる中で、知識同士を結びつけて概念を獲得したりする過程に該当する。もちろん森分の理論が全てではないが、新学習指導要領でも述べられている概念的知識の習得には、子どもたちが知識を理解に繋げる「思考力・判断力・表現力」が存在は否定できない。実際、「思考力・判断力・表現力」について、次のような記述がなされている。

「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」(①p.3)

新学習指導要領では、「理解していることやできることをどのように使うか」と具体的に説明されている。学んだ知識を実際に社会の場面で使う際の「思考力・判断力・表現力」を示しており、「知識を活用する力」と簡潔に表すことができる。

②真正な学びへの脱却

近年「真正の学び」が提唱され、その意義が見つめ直されている。「真正」という用語は、一般的に「リアルな」、「真正銘の」という意味を表している。石井英真氏は、これまで通りの認識の「従来の学び」と「真正の学び」の違いを比較している。石井は、「真正の学び」の学習の深さは、従来の知識を網羅する学習と比べて、「深い学び」を達成するものであるとしている。

表1 『『真正の学習』と標準的な学校学習の比較』

側面	標準的な学校学習	真正の学習
学習の目的	試験に通ること	理解を深め、問題を解決すること
知識へのアプローチ	学習を示すのに知識を再生する	問題を解決するために知識を生産する
学習する内容	事実、データ、アルゴリズム、公式	鍵となる概念、方略
思考過程	再現、理解	分析、総合、方略
学習の深さ	浅い、網羅を達成する	深い、理解を達成する

(参考図書②p. 255 参考に筆者作成)

「真正の学び」を提唱するニューマンも、「知識の構築」「鍛錬された探究」「学びの学校外での価値」の3つの基準を通して定義している。この3つの基準のうち、特に「学びの学校外での価値」について、桑原氏は次のように述べている。

ニューマンの「真正の学び」の主張の独自性は「学びの学校外での価値」にあり、それが他の教育論との決定的な違いとなっているということになる。(③p. 502)

つまり学校外で実際の学びの活用こそ価値付けに値し、これまでの他の教育論との決定的な違いとして位置づけ、ニューマンの論を支持・評価している。

「真正の学び」における「学力」とは、教室で行われる授業内で得られるものではなく、子どもたちが生きる社会において、子どもたちが自ら探究し、得られるものである。それについては石井も次のように述べる。

知識を活用したり創造したりする力は、(中略)学習者の実力が試される、思考し、コミュニケーションする必然性のある文脈において、共同で深い学習(真正の学習)に取り組む中でこそ育てられます。そして、「真正の学習」を通して、その分野の内容知識や思考力、さらには、その分野の本質(より善い活動)を追究しようとする態度は、一体のものとして育っていくのです。(④p. 14)

すなわち、学校から出た社会の場面(教室外の世界)において、子どもたちも大人と同じように思考し、またその中で、知識やその活用の仕方を育むというものである。また、こうして子供たちが

自身で知識を獲得したり、思考力を働かせたりする学習こそが、より本質の資質・能力の育成に繋がる。

③「深い学び」を含めた「思考力・判断力・表現力」の位置づけ

「真正の学び」にも、もちろん「知識を活用する力」等に関わってくる。しかし、学校の教室の中で教科書を主体に学習を進め、その知識を活用するのではなく、子どもたち自身が社会との繋がりを考えながら学習を進めていく点に特徴があり、「思考力・判断力・表現力」を超えた先の社会の中における「思考力・判断力・表現力」であると捉えることができる。この「真正の学び」における「思考力・判断力・表現力」は、これまでの学習と比べ、より深い理解や思考を生み出すことができる「深い学び」である。さらに、この「思考」について、ニューマンは、次のように述べる。

「より低次な思考は、これまで学んできた知識を決まりきった形で機械的に当てはめていくことだけを求めている一例えば以前に記憶した情報を表に並べていくことだとか、前に学んだ公式に数を挿入していただくとか、リサーチペーパーの脚注についてのルールを当てはめることといった繰り返しの活動のことである。(中略)逆により高次な思考は、生徒たちに情報を解釈し分析し操作するよう挑ませる。なぜなら答えるべき問い、解釈すべき問題がこれまで学んできた知識の決まりきった活用を通してでは解決し得ないからである。」(③p. 447)

記憶を思い起こしたり、当てはめたりする思考は下位なものとして位置づけられ、その上に、決まりきった活用ではなく子どもたち自身が社会について考える「高次な思考」が存在する。「真正の学び」(=「深い学び」)を通して、学校外の社会で子どもたちが自ら疑問をもち、考える「高次な思

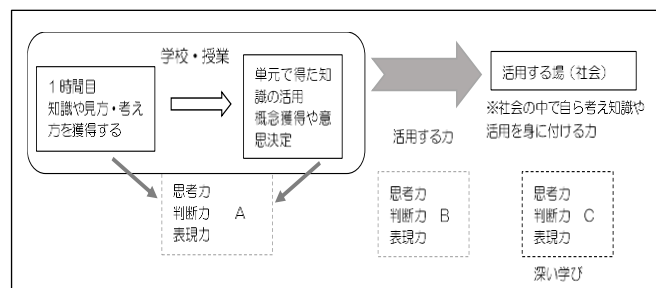


図1 深い学びを意識した社会科授業過程

考」ができるようになることを目指なければならぬ。そうすると、「真正の学び」(＝「深い学び」)まで踏まえた理想的な授業は、現実社会の中においてまで見据えた子どもたちが働かせる「思考力・判断力・表現力」として社会科の学習の中へ位置付ける必要がある。(図2)

3 「思考力・判断力・表現力」の評価

(1) 「思考力・判断力・表現力」の取り扱い

新学習指導要領にける学習評価の観点とは、2016年中央教育審議会答申で「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到に定められている。その中で、「思考力・判断力・表現力」は3つの力を1つの観点として取り扱われている。実際に詳しく評価を行う際、これら3つの力をどのように取り扱うかを検討する。「思考力・判断力」の取り扱いについて、伊藤氏、荒木氏は次のように述べる。

社会科学習においては「思考・判断」とセットで語られることが多い。(中略)つまり事実に基づいて皆で確認できる見方・考え方を得るのが思考であり、そうした思考をふまえて自分なりの見方・考え方を形成していくのが判断である。

(⑤p. 6)

このように社会科において「思考・判断」は、「思考」したことを「判断」するという流れの関連性が見られることからセットで捉えることが多い。2つの力の関連性については、学習指導要領の作成側にいた澤井も次のように述べている。

思考が広がったり深まったりすることで判断力も高まるなど関連性が強いので、ひとまとまりでとらえるのです。(中略)「思考力・表現力」とセットでとらえて、評価して育てていくべきでしょう。(⑥pp. 16-17)

ここでも、「思考力」と「判断力」は、それぞれの力の特徴から、関連性が強いものであり、ひとまとまりとして捉えるべきだとされている。このことから、評価の際には、この2つの力を関連させて取り扱うことができるということが分かる。一方で、「表現力」とは何かという問いについて、澤井は以下のように答えている。

当然、相手にわかるように説明することです。そのためには以下のようなことが求められます。

- ・根拠や理由を示して
 - ・解釈してから自分の言葉を使って
 - ・具体例を挙げて
- などです。(⑥p. 17)

「表現力」は、根拠や理由が示されているか、自分の言葉で具体例を挙げるなどして、相手に伝わるように説明できていることを求められる力としている。つまり、この能力の内容は、「思考・判断」で「考えたこと・判断したこと」を「どのように表現できるか」という内容であり、切り離して考えられているため、「表現力」は単体で取り扱うことが望ましいと考える。

以上のことから、評価の際の「思考力・判断力・表現力」は、「思考力・判断力」と「表現力」の2つの観点に分けて取り扱うこととする。そうすることで、子どもたちの指導にも具体的な支援を考えられ活かすことができる。

(2) 実際の評価問題の課題

学校現場で使用されているテストは、市販の業者テストを中心に、様々な問題形式で構成されている。多くある問題形式を分類すれば、「多肢選択式」と「論述式」が用いられていることが多い。

① 多肢選択式テスト問題

「多肢選択式」を採用する主な理由として、次の2点が挙げられる。

- ・評価内容の中でも、特にある知識を限定して評価するのに適していることである。
- ・選択問題が第三者による評価の判断が容易である。

この選択問題を解答させることで、知識同士の関連や結びつけをさせる思考を求めることも可能ではあるが、「多肢選択式」で扱われる解答では、基本的には「知識」が主に扱われている場合が多い。こうした「多肢選択式」の課題が学校現場の標準テストで扱われることについて、田中耕治は、次のように問題点を指摘し、この問題形式の無条件の信頼を批判している。

- A) 理解や反省を犠牲にして、代わりに再生や棒暗記に過度の価値を置きすぎている。
- B) ほとんどの問題には、ただ一つの正しい答えがあるという誤った印象を強めている。
- C) 生徒を、答えや解決方法を構築するのではなく、ただ受容するだけの受け身の学習者にして

しまっている。

- D) 生徒にとって学ぶに値する内容ではなく、テストに出されやすい内容に教師の目を向けさせてしまっている。

(⑨p.6)

② 記述式問題

「多肢選択式」の問題は、知識に偏った測定傾向にあるとしたが、「記述式」は測ることができなかった思考力や文章力などを測ることができるとされている。文章力は社会科において他者に伝える「表現力」と繋げることができる。また、「多肢選択式」の問題形式で危惧されていた、子どもたちの学習への影響も、子どもたちは一つの正答を暗記する学習ではなく、記述で解答できるように学習するため、テストに向けた学習の姿勢や授業内容にも、良い影響があるといえる。

一方で、「記述式」では、採点が採点者の主観によって行われる。そのため、採点者によって採点結果にバラつきがでてしまう。入試など点数が大きく関わる場面では、評点のバラつきは致命的である。先行研究では、高校生165名の作文に11名の採点者の与えた評点間の相関係数が、0.22～0.57であった。また、3名の採点者が1週間の間隔をあけて同じ答案を2度採点する試みも実施したところ、評点間の相関係数が最も低い採点者でも0.4あり、最も高い採点者は0.91であった。

このように、採点者によって評点が大きく異なるばかりか、採点者自身の中でも評点にバラつきがある。つまり「思考・判断・表現」は測ることができるとしても、ある一定の条件を満たさない場合は評価としての信頼性が確保されなく、評価方法としても適切ではなくなってしまう。

4. 「作文」を用いた「深い学び」の評価の在り方

社会科の「深い学び」とは、学習した知識を活用し、また、子どもたちが自ら社会について考えることができる力である。「深い学び」である「思考力・判断力・表現力C」(図2参照)に繋がる前段階を目指したいが、小学校授業でいきなりそこまでの知識ではなく、まずは学習した知識を社会に活用できる「思考力・判断力・表現力B」を中心に評価する方法を考える。例えば、戦後行われていた生活綴方教育やそれを用いた社会科教育では、作文を書くことによって、子どもたちに社会その

ものを捉えさせ、当時の社会について考えるよう促し、その中で探究学習をさせた。また、社会を捉えた作文を書くことを通して、主体的に社会に関わる態度の育成も期待されていた。その際、教師も、作文で子どもの考えを見える化したことによって、評価でき指導に繋げることができていた。

そこで、綴方教育においてリアルな社会を見つめ、現実社会について考えることができていた「作文」を社会科の評価に用いる。そうすることで、子どもたちの社会に対する思考を促し、その表現された考えを見て知識を「活用」する「思考力・判断力・表現力」を測ることができる。また、その問題等に自身と社会との繋がりを意識できるような要素を取り入れることで、より「深い学び」へ近づけるようにする。

「作文」を用いて「深い学び」に位置づく「思考力・判断力・表現力」を測るために、パフォーマンス課題として、知識の活用の「場」となるような問題を設定する。まず、「逆向き設計」論を用い、子どもたちにつけさせたい力、最終的な段階で目指す姿を明確にする。そして、子どもたちが学習した知識を活用したり、社会と自分との繋がりについて考えたりすることができるような、ねらいに沿った「思考・判断・表現」を促す問題設定を行う。

評価では、ルーブリック評価を用いる。評価の際は、「予備的ルーブリック」を予め作成しておき、完成した子どもたちの作文からさらにルーブリックを練り直し、細かく子どもに合った基準を

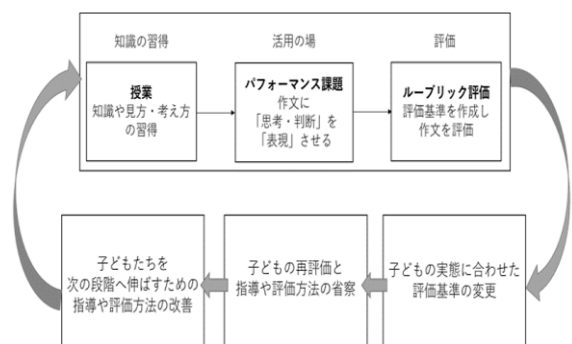


図2 『深い学び』を実現する作分の評価過程

作って評価をすることで、「作文」から子どもたちの考えを詳しく読み取ることができる。また、その評価を踏まえ、ルーブリックの次の段階へ子どもたちがレベルアップできるような指導方法の改

善を行い、的確な指導に繋げることができる。

5. 評価の実際

本研究の作文を活用した評価については、実際に岐阜市の小学校5年と6年生において、それぞれ通常の単元終末の段階で実施を試みた。本稿では、6年生における「新しい日本、平和な日本へ」に関して考察を行っていく。

(1) 単元について

本単元において、授業者は戦前から戦後までをひとまとまりとして単元として学習を進めている。その際、「平和で民主的な国家をつくろうとした」という戦後の日本の核となる部分を子どもたちに常に意識させるよう心がけていた。

授業者は「オリンピック・パラリンピック」を取り上げ、「1940年のオリンピック・パラリンピックはなぜ開催できなかったのだろう」といった小単元を設置し、1946年のオリンピック・パラリンピックについての授業をおこなったり、単元の最後には2020年の東京オリンピック・パラリンピックが行われるという話題を取り上げたりするなど、授業中に課題に関わるよう促した。

(2) パフォーマンス課題の設定に関して

6年生の作文課題の設定にあたって、「新しい日本、平和な日本へ」の単元の、評価で扱う部分の学習指導要領解説における「知識及び技能」の目標は以下の通りである。

日中戦争や我が国に関わる第二次世界大戦、日本国憲法の制定、オリンピック・パラリンピックの開催などを手掛かりに、戦後我が国は民主的な国家として出発し、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解すること。(①p.123)

これまでの学習で、戦後の日本において、「日本国憲法の制定によって民主的な国家が作りあげられたこと」や「東京オリンピック・パラリンピックの開催により、国民生活が向上し、国際社会における役割もより重要なものになってきたこと」を理解している。

次に、「思考力・判断力・表現力」は、上記の「知識」をふまえ、「我が国の歴史の展開や歴史を学ぶ意味」を「思考・判断」し、「表現」が出来ているかどうか求められる。本研究において評価したい内容に関わるのはこの部分であり、そのために

は、これまで「深い学び」の評価(図2参照)について述べたように、これらを「活用」できる場としてパフォーマンス課題の設定をし、「思考・判断」に迫り、作文に「表現」からその実態を探った。

学習指導要領にも述べられているが、歴史の出来事や流れを現代とも結びつけて考えることは、「思考力・判断力・表現力」の「歴史の展開」や「歴史を学ぶ意味」を考えることにも繋がる。そこで、これらを活用する場として、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの事例を取り上げ学習者の思考に迫ることとした。

今回は、本研究における「思考・判断」の定義に当てはめると、戦後の日本において特に「東京オリンピック・パラリンピックの開催が、国民生活の向上や国際社会での日本の役割の変化につながった」という社会の変化やその際の社会の見方・考え方を捉え、現代の社会事象になってもそれを活かして判断する力を測るということである。以上を踏まえ、今回の「2020年東京オリンピック・パラリンピック」の事例において、子どもたちからは、次のような「思考・判断」を引き出した。

- ・交通等が発達し、くらしが便利になると考えられる。(国民生活)
- ・多くの人が集まることで、わたしたちが不便になることもある。(国民生活)
- ・経済の発展につながる。(国民生活)
- ・日本人として誇りをもって世界とつながることができる。(国際社会)
- ・多くの国と関わることになり、グローバル化がすすむ。(国際協調)
- ・戦後復興に関わったように、震災などの復興にもつながる。(開催意義)

これは、教科書に記された文言を参考に、事前に整理したものである。すなわち、戦後の歴史を学習し、そこで得られた「国民生活の向上」や「国際社会の中での役割が変化」、また、その時代全体を捉えることができているかどうかということである。例えば、国民生活については、良くも悪くも影響があるということをとらえられていれば、活用して考えられていると評価したい。戦後の学習で得られた知識及び見方・考え方を、現代の場面においても活用し、歴史の展開を考え、歴史を学ぶ意味を考えられたかを見取っていく。そこで、「思考・判断」を促すための作文課題は、以下の

ように設定した。

「みなさんは、これまで戦後の歴史について学習してきました。2020年再び東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。関連すると思う資料や学習してきたことをふまえて、社会はどう変化するのか、オリンピックとはどのようなものか考えてみましょう。」

しかし、2020年の東京オリンピック・パラリンピックについて、基礎的な情報や知識がない子どもは作文を書くことができない。そこで、子どもが考える情報として、2020年の東京オリンピック・パラリンピック関連する資料（資料参照 次頁）を用意した。子どもたちは、配布資料を参考に思考し、パフォーマンス課題に取り組んだ

(3) 評価基準の作成

実践を行った作文の評価に当たって、パフォーマンス課題としての作文については、ルーブリックを作成し、評価を行った。

子どもの作文を見ていない状態で、当初、予備的ルーブリックは次のように作成(表2)した。

表2『思考力・判断』『表現』のルーブリック(事前)

	思考・判断	表現
A	・学習した知識や見方・考え方を他の社会の事例にも投影し、問題をみることができたか	・根拠を示しながら他者に伝わるように詳しく分かりやすく自分の言葉で説明ができています
B	・学習した知識や見方・考え方を教科書や資料に投影し、問題をみることができたか	・問題文に沿った説明ができています
C	・教科書・資料等から問題文に関わる該当部分を選び取ることができたか	・問題文から一部外れている部分がある
D	・全体的に教科書・資料等から問題文に関わらない部分をかいている。	・全体的に教科書・資料等から問題文に関わらない部分をかいている。

このルーブリックで「D」は、問題文に関わらないことを書いているなど「学習を活用した思考・判断」ができていないものとした。「A～C」は「学習内容を活用した「思考・判断」ができてい

るものを、それぞれ活用の段階に分けたものである。

しかし、表2の「予備的ルーブリック」を用い

て作文を評価・分析した際、どの段階にも当てはまらないもの等、評価が困難な作文が現れた。また、評価が偏ってしまい、子どもたちの本来の「思考力・判断力」、「表現力」を読み取ることができなかった。そこで全ての作文を読んだうえで、子どもたちの実態に即しているルーブリックに変更を行った。最終的なルーブリックは次の表3のとおりである。

表3『思考力・判断』『表現』のルーブリック(改訂)

	思考・判断	表現
A	・これまでの学習で学んだ知識や見方・考え方と資料をつなげて思考・判断することができている	・根拠や例示を示しながら他者に伝わるように詳しく自分の言葉で説明ができています
B	・資料等や既存の知識及び経験から思考・判断することができている	・自分の言葉を使って説明ができています ・問題文に関わる文章であるが、一部文脈につながりがない
C	・資料等から問題文に関わる該当部分を選び取り思考・判断することができている	・資料等の言葉をそのまま使って説明をただけ ・問題文の一部関わらない部分がある
D	・資料等から、全体的に問題文に関わらない部分をかいている ・問題文について思考・判断することができなかった ・空白	・資料等から、全体的に問題文に関わらない部分をかいている ・文脈に繋がりがなく分かりにくい ・空白

(4) 作文評価例

①思考力・判断力

思考力・判断力の評価では、2020年オリンピック・パラリンピックにおいても戦後の日本社会や1964年の東京オリンピックで学習したような視点で「社会」を見たり、社会に起こる変化やその変化からみる開催意義を捉えられたりしているかどうかを見る。

項目は次の3点とする。

A: 国民生活の向上

B: 国際社会とのつながり・国際協調

C: 大会の開催意義

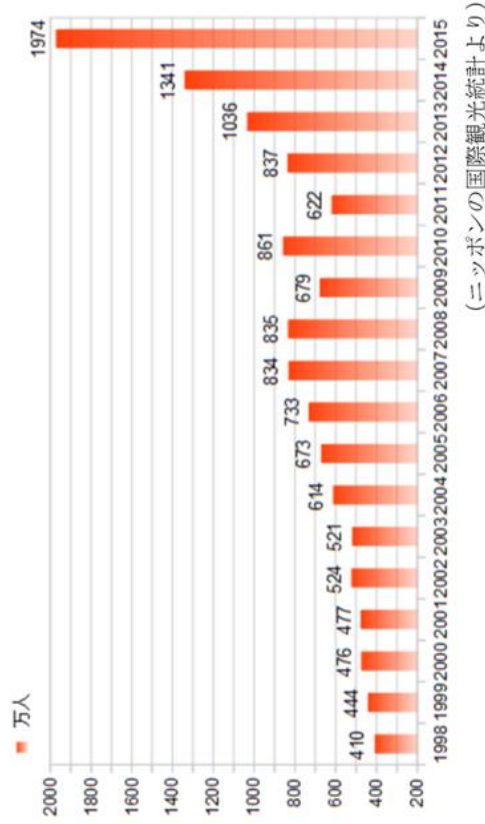
以下に6年生の「思考・判断」のA～D評価と判定した評価例を示す。

〈資料1〉燃料電池バス「SORA」

2020年にむけて TOYOTA は燃料電池で動くバスを開発し、今後町でも走る予定。揺れや音が少なく快適な乗り心地。災害時には電源にもなる。(TOYOTA 公式ホームページより)



〈資料2〉外国人旅行客数の推移



〈資料3〉沖縄アメリカ軍基地問題

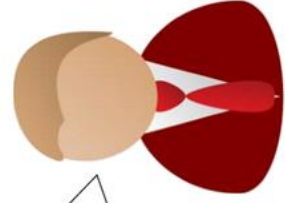
沖縄は、1972年にアメリカから返還されました。しかし、今でもアメリカ軍の基地は残されたままです。基地の移転問題やアメリカの兵士が起こす事件など、多くの問題をかかえています。

(ParsToday2016. 8. 20/教科書 p 151 より)



〈資料4〉大会組織委員会の人の話

大会を開催するためには、
3兆円のお金が必要です。
お金は、
国や東京都が支払います。



(NewSphere2018. 10. 19 より)

【A 評価】

ぼくは、オリンピックを通して世界は経済が活せい化すると思います。なぜなら、東京オリンピックをすると、⁽⁷⁾ 建設費が高くて外国人が日本に来るので、日本の経済が良くなり、世界も経済が活せい化すると思います。

他にも、外国人客が来ることによってバスや電車の会社では新しい乗物をつくるので、⁽⁷⁾ 交通が発達してそして、その乗物が町にもつかわれるので、国民に良いえいきょうをあたえてくれます。

他にも、日本人の選手も産まれた祖国で活やくしたいと思うので、選手にも良いえいきょうをあたえられて、その活やくを見た国民も、日本の選手ががんばっていて、うれしいので日本人に良いえいきょうがあたえられます。

また、⁽¹⁾ 日本の国交についても良いえいきょうをあたえてくれます。なぜかという、日本で多くの選手と戦争じゃない競技で争うことによって参加した多くの国との関係が築くことにつながるからです。

なので、アメリカとの基地や、ロシアとの北方領土などの問題を解決できるかもしれないので、国交に良いえいきょうがあります。また、せいかりレーでも多くの国で火を消さないように日本に持ってきて、そのリレーをした国との関係を築くことにもつながってきます。なので、国交に多くの良いえいきょうをもたらしてくれます。

なのでオリンピックパラリンピックは、⁽⁹⁾ 多くの人や国や国の関係に良いえいきょうをもたらしてくれたり、世界中の経済に良いえいきょうをもたらしてくれる平和の象ちょうなのであって、また、人や国に良いことをもたらしてくれています。だから、オリンピックパラリンピックは多くの広い世界でやられている多くの国に平和と幸福をもたらしてくれる良い競技・スポーツなのである。

(児童作文のママ 下線筆者)

この作文では、授業で学習した (ア) ~ (ウ) の社会を見る視点を持ち、資料と関連させながら、2020年の東京オリンピック・パラリンピックによって起こりうる社会の変化や開催意義について述べるができています。

【B 評価】

これからのオリンピックパラリンピックは、どんどん人数が増えて、白熱した戦いになると思います。

なぜ、そう思ったかと言うと、これから、もっと、⁽⁷⁾ いろんな技術が進歩して行って、もっと楽しくなり、外国の方も日本人も、楽しめられるからです。

この資料1, 2, 3, から、⁽⁷⁾ ⁽¹⁾ 新しい、物が作られたり外国人の客数もとても多くなるからです。

オリンピックパラリンピックは、どういう物かと言うと、世界中の人がテレビとかを見て、とにかく楽しむことが、世界中の人を楽しませるためにあるか

ら、この2020年のオリンピックパラリンピックはみんなを楽しませるものだと言うことです。

この資料1を見ると、どれを作るかなどの表も書いてあるからすごく2020年のオリンピックパラリンピックが楽しみです。

でも、資料4では、3兆円というすごいおおいお金だから、少し心配です。

資料3を見ると、今でも、アメリカ軍の基地は残されたままです。て、書いてあって、アメリカの兵士が起こす事件など、多くの問題を抱えています。と書いてあるから、アメリカ兵士が何を起こすかが分からないし、このままずっと進んでいくうちに、何かを起こすかもしれないから、すごくこわいです。

(児童作文のママ 下線筆者)

全体的な内容としては (ア) ~ (ウ) の視点をもつことができている。しかし、「外国人の人の客数も増える」からどうなるのか、どのように「楽しませる」のか等、日本の社会の変化の段階にまで至っていない。また、資料から下線部のように「心配」や「こわい」というような、自身の感想で考えが留まってしまっているため、B 評価とした。

【C 評価】

問題文に関連する資料の解説のみや、文章の抜き出しのみに留まっている作文は見られなかった。

【D 評価】

私は、

(児童作文のママ)

ほぼ記述ができていない作品である。「思考・判断」にまで至らなかつたと判断し、D 評価とした。

② 表現力

以下に6年生のA~Dの評価例を示す。「表現」の評価のポイントとなった部分を下線で表す。

【A 評価】

私は、オリンピック・パラリンピックと人々の生活、社会は密接な関係になっていると思う。1964年の東京オリンピック・パラリンピックでは、日本人は、絶対に成功することができるように一生けん命働き、努力をした。オリンピックの開さいによって、日本は復興をすることができた。本来、オリンピックは平和の祭りで、世界平和を目的とするものであったが、人々を勇気づけたり、オリンピック・パラリンピックに向けて、国を盛り上げていくことで、より国が良くなるという目的を持っているのではないかと考えた。資料1から分かるように実際に2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて、日本のくらしが良くなるためのものの開発が進んでいる。

その一方で気を付けなければならないこともいくつかあると思う。資料2から分かるように外国人観光客が増えているため、公共施設を使うときのルールをしっかりと守ることや外国人の人のための道案内の人もこれからは必要となってくると思う。近年急激に観光客が増えてきて、まだ整備が整っていないかたり、こまることも多かたりするので、2020年までに整備をしっかりと、安心して日本に来ることができるようになることが1つの課題だと思う。

もう1つ気を付けなければいけないことがあると考えます。それは、大会を開きするためのお金についてです。大会を開くためには約3兆円のお金が必要です。このお金は、国や東京都が支払うということが資料4から分かりました。2019年には消費税率も8%から10%に上がります。直接オリンピックには関係はありませんが、消費税のお金は国のお金になります。東京オリンピックを開きするには本当に必要なものだけにお金を使うということが大切なのではないでしょうか。

現在、日本には資料3から分かるように、アメリカとの基地問題をかかえています。このようなものは、世界平和とは少しちがうかもしれませんが、オリンピック・パラリンピックを通してアメリカが少しでも改善してくれればと願います。

最初に書いたように、世界と人々とオリンピック・パラリンピックは密接な関係になっているということがこれらの理由で挙げることができます。オリンピック・パラリンピックをこれからも続けることで、世界がいつか平和につながってほしいと思いました。

(児童作文のママ 下線筆者)

全体の構成として、最初の主張の根拠を自分の言葉で解説していく流れで、他者に伝わるように分かりやすく説明されている。また、その主張の根拠として資料を示しながら詳しく説明されているため、A評価とした。

【B評価】

私は、2020年東京オリンピック・パラリンピックをかいさいすると、社会にいろんな変化があると思います。

1つ目は2020年にむけて開発されている燃料電池バスでは、揺れや音が少なく快適な乗り心地で、災害時に電源にもなるので、もし、災害がおきたときに、役立つので災害でのひがいが少なくなると思います。

2つ目は、外国との関係がよくなると思います。オリンピック・パラリンピックでは、いろんな国の人が東京へくるので、資料1の燃料電池バスなどを見て、外国の人にすごいなと思ってもらえて、日本は信らされると思うからです。また、日本が信らされると外国人旅行客がふえていくと思います。

(児童作文のママ 下線筆者)

問題文について、自分の言葉を使って説明できている。しかし、例えば「日本が信頼」されるとなぜ「外国人旅行客が増える」のか等、その主張に詳しい根拠や理由が示されていないかたり、文脈に繋がりがなかつたりする部分がみられるため、B評価とした。

【C評価】

ぼくは、東京オリンピックパラリンピックを東京で開催するのは反対です。理由は、まず大会を開くために3兆円も必要で、それは国や東京都が支払うと言っているけど、そんな所にお金を使うなら、今までに災害にあつてきて、まだ復興が進んでいない所にお金を使った方がいいと思うからです。そして、オリンピックパラリンピックで外国人旅行客の増加を目指していると思うけど、今でも十分外国から人が来ているとおもうから。さらに、トヨタは、オリンピックパラリンピックに向けて、燃料電池で動くバスを開発しているけど、今のバスのままでも良いと思う。しかもそこを開発を進めるのなら、もっと今の車を良くしたりしてほしいから。なので、この理由をふまえて、東京オリンピックパラリンピックを開催するのは反対です。

(児童作文のママ 下線筆者)

全体の内容としては2020年の東京オリンピック・パラリンピックについての文章であり、お金の使い道等も社会を見たらうえで考え、自分の言葉で説明されている。しかし、開催の賛否について言及しており、問題文に示された問いやこれまでの学習を踏まえたうえでの「社会におこる変化」や「オリンピックとはどのようなものか」という趣旨から外れてしまっている。C評価の作文とした。

【D評価】

私は、オリ

(児童作文のママ)

ほぼ空白であり、「表現」ができた判断できないため、D評価の作文とした。

6. 「作文」を用いた評価の有効性

本研究では6年生だけではなく、5年生にも同様の調査をした。両者を比較すると「思考・判断」の評価の分布については、ほぼ類似した傾向を表しており、その達成度合いは上位層に集中していた。一方、「表現」については、6年生に比べ、5年生はA評価の割合が小さく、C評価の割合が大きいことが分かった。現段階で、5年生は全体的に「表現力」に弱い部分のある子どもが多いこと

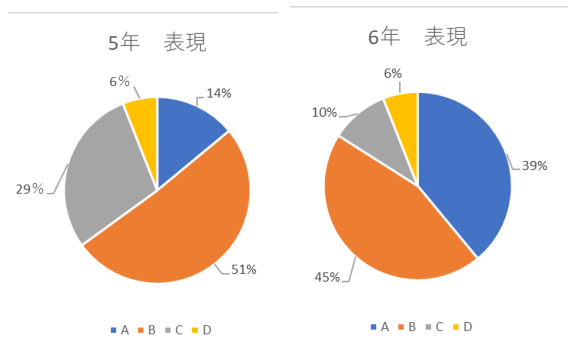


図3 児童の「表現力」の反応

が見え、5年生の表現の実態を捉えることができた。当然、パフォーマンス評価の資料についても今後、5、6年生の調査から再検討を加えていかなければならない。また、両学年とも一定の割合でD評価の子どもが存在することも分かる。このように、結果からその学年や学級の子どもたちの特徴も分析することができた。

市販テストの思考力・判断力・表現力は、それぞれの評価基準が曖昧であるなど、詳細な評価がされていない。思考されたことが書けているかということは、教師の裁量で評価がされてしまう。しかし、その学級の学びに即したルーブリックを作成することによって、より詳しく現在の力を測ることができる。さらに、ルーブリックで段階を設定したことで、次に目指す段階も同時に明確になるため、その後の指導改善に繋がる。このことから、作文を書かせ、考えを可視化することによって、普段の市販のテストからはみることのできない、活用における「思考・判断」を促し、「表現」させることができ、「深い学び」を読み取ることができることが明らかになった。また、これまでの指導の成果及び課題が明確になり、いわゆる指導と評価の一体を見つめなおすことになり、教師自身の省察となる。

こうしたことを繰り返せば、一人一人へ細かく適切な指導へ活かすことができる。例えば、今回「表現」がC評価だった子どもには、普段の授業場面においても、その力が伸びるよう、自分の言葉で説明するよう促したり、解説の少ない資料を与えることによって資料を読み解き、表現する力をつけさせたりするなど、日々の指導の改善に役立てなければならない。

7. おわりに

こうした作文評価は、その見取り時間の負担とといった点から、実施の頻度は考えたい。**毎時間細かな評価**を行うことは困難なため、単元や学期、学年など学習の最初と最後に「作文」評価を実施し、その違いを読み取ることも可能である。そうすることで、採点者である教師の負担も減り、子どもたちの作文変化を丁寧に見取って、本来の**指導と評価の活用**につなげることができる。

また、**実施内容の簡易化も考えられる**。今回の実践では30分の時間をとり、子どもたちは原稿用紙最大2枚文の作文を書かせた。例えば、実施の時間を短くしたり、書く文量を少なくしたりするなど、表現の簡易化を図ることによって採点する際の負担の軽減になる。いずれにしても、今後とも検討が必要な課題である。

《引用・参考文献》

- ①文部科学省(2019)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編」
- ②石井英真(2011)「現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計—」東信堂
- ③フレッド・M・ニューマン著 渡部竜也、堀田論訳(2017)「真正の学び/学力—質の高い知をめぐる学校再建—」春風社
- ④石井英真(2015)「日本標準ブックレットNo.14『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』」日本標準
- ⑤伊藤昭治、荒木紀幸(2002)「社会的判断力の育成に関する基礎的研究」
- ⑥澤井陽介(2012)「文部科学省教科調査官が語る!『思考力・表現力』徹底解説!」なぜ、今、『思考力・表現力か』Vプレス vol.12
- ⑦寺尾健夫(1990)「小学校社会科歴史テストの分析—総合テスト問題作成過程の再構成—」社会系教科教育学会『社会系教科教育研究』第2号 pp.59-66
- ⑧寺尾健夫(1991)「小学校社会科歴史テストにおける解答方法の特性—多肢選択問題解答過程の分析を通して—」全国社会科教育学会『社会科研究』第39号 pp.56-69
- ⑨田中耕治(2013)「教育評価と教育実施の課題『評価の時代』を拓く」三学出版
- ⑩井上俊哉(1996)「論述式テストの利用について—客観テストと比較して—」東京家政大学研究紀要 第36集 pp.7-16